

主要国の野菜の生産動向等

調査情報部

1 中国

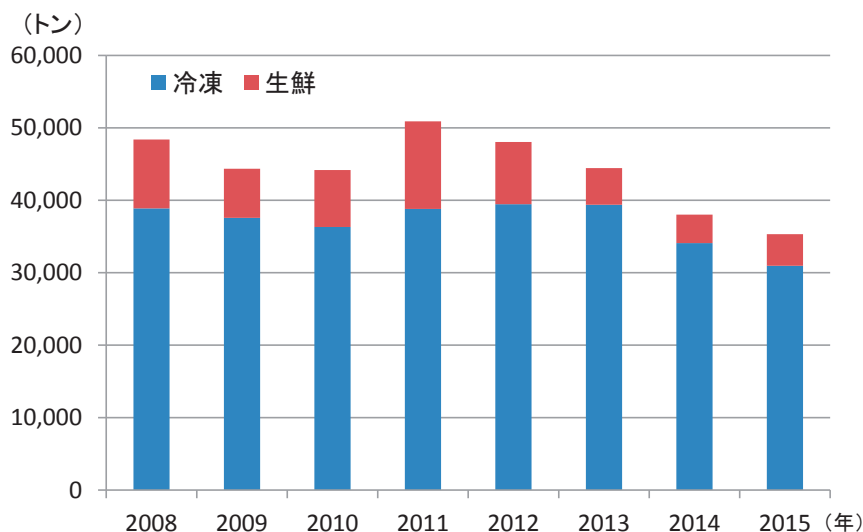
日本が輸入するさといもは冷凍品が9割近くを占め、そのほぼ全量が中国産であることから、今月号では、山東省を中心に中国のさといもの生産動向等を紹介する。

(1) 日本における中国産冷凍さといもの位置付け

近年のさといもの輸入量を見ると、冷凍品が9割近くを占め、また、生鮮品・冷凍

品ともにほぼ全量が中国産である。2013年以降、やや減少傾向にあるものの、おおむね安定的な数量で推移している（図1）。

図1 さといもの輸入量の推移（生鮮・冷凍別）

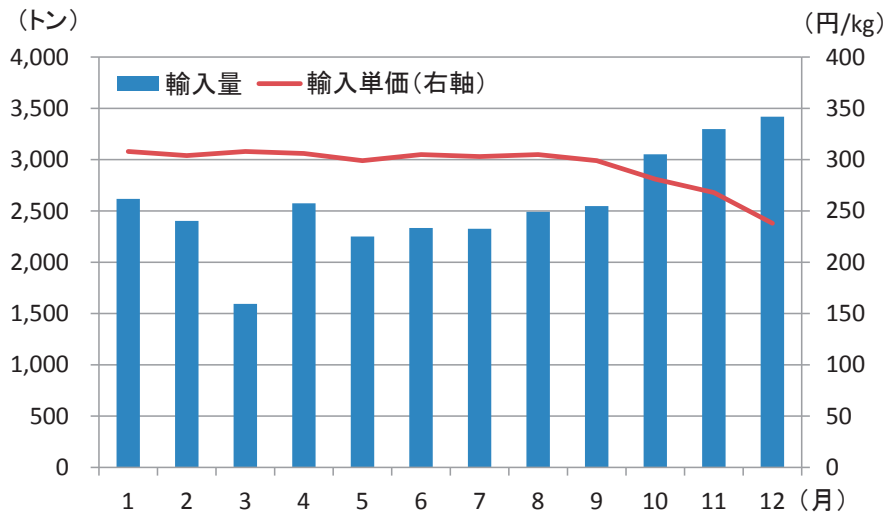


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

また、冷凍品について月別に見ると、年間を通じて輸入されているものの、日本で需要が高まる冬場の輸入量が比較的多い（図2）。

なお、本稿中の為替レートは1元＝17円（2016年11月末日TT S相場：16.58円）を使用した。

図2 中国産冷凍さといもの月別輸入量と輸入単価（2015年）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

(2) 生産動向

中国のさといもの主産地である山東省におけるさといもの生産は、青島市、煙台市

など東部を中心に行われている（図3）。山東省のさといも栽培は、4月に植え付け、9月に収穫する（写真、図4）。

図3 山東省のさといも主産地分布図



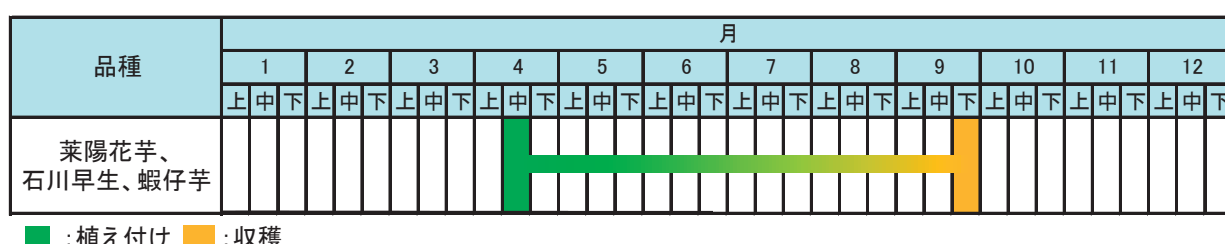
資料：聞き取りにより機構作成

近年の生産動向を見ると、2014年は、一部で高温干ばつ気候が見られたものの、最終的な収穫量は前年を上回り、2015年も、良好な気象条件から前年を上回った。一方、2016年は、前年の収穫量増加に伴う価格下落の影響に加え、多雨や干ばつなどの不安定な気象条件の影響も受け、作付面積、収穫量ともに前年を下回る見込みである（表1）。



写真 山東省で収穫されたさといも
(青島晩報提供)

図4 山東省のさといもの生育ステージ



■ : 植え付け ■ : 収穫

資料：聞き取りにより機構作成

注：本図は、植え付け、収穫が最も集中する時期を表しており、実際には前後の時期にも、それぞれの作業は行われているとみられる。

表1 山東省のさといもの作付面積、収穫量および単収の推移

年	作付面積 (千 ha)		収穫量 (千トン)		単収 (トン/10a)	
		前年比 (増減率)		前年比 (増減率)		前年比 (増減率)
2012年	12.0	▲ 9.8%	350	▲ 18.6%	2.92	▲ 9.8%
2013年	12.0	0.0%	330	▲ 5.7%	2.75	▲ 5.7%
2014年	12.7	5.8%	380	15.2%	2.99	8.7%
2015年	13.5	6.3%	420	10.5%	3.11	4.0%
2016年	12.9	▲ 4.4%	360	▲ 14.3%	2.79	▲ 10.3%

資料：：山東省農業庁種植業管理处

注1：2016年は見込み値。

注2：単収は収穫量を作付面積で除して算出。四捨五入の関係から、項目間の計算において、誤差が生じることがある。

(3) 生産コスト

10アール当たりの生産コストの動向を見ると、2016年は5000元（8万5000円、2013年比35.0%増）と、大幅に増

加している（表2）。項目別に見ると、近年の中国の野菜生産全般に見られる傾向であるが、土地代と人件費が大幅に上昇している。

表2 山東省のさといもの10アール当たり生産コスト

項目	2013年(元/10a)		2016年(元/10a)		2016年/ 2012年比 (増減率)
		円換算		円換算	
土地代	1,199	20,383	1,799	30,583	50.0%
種苗費	405	6,885	202	3,434	▲50.1%
肥料農薬費	675	11,475	675	11,475	0.0%
資材費	150	2,550	150	2,550	0.0%
農機具費	150	2,550	150	2,550	0.0%
人件費	1,049	17,833	1,949	33,133	85.8%
その他	75	1,275	75	1,275	0.0%
合計	3,703	62,951	5,000	85,000	35.0%

資料：聞き取りにより機構作成

注1：2016年は見込み値。

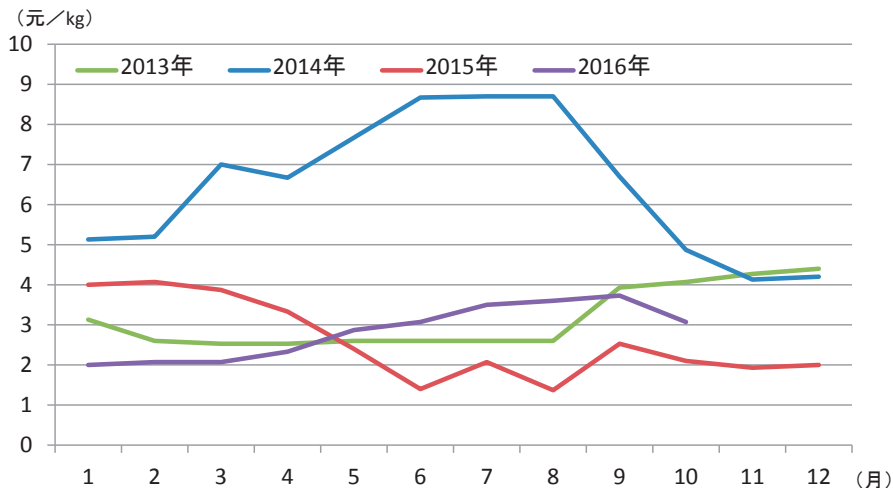
注2：四捨五入や為替換算の関係から、項目間の計算において、誤差が生じることがある。

(4) 価格動向

山東省のさといもの価格推移を見ると、年ごとに異なる傾向となっている(図5)。2014年は、前年の収穫量の減少に伴い上昇し、それを受けて2015年は、作付面積、収穫量ともに増加した結果、価格は下落し

た。2016年は、価格下落に伴う作付面積、収穫量の減少から、再び上昇傾向となっているものの、依然として在庫が多く供給量が潤沢と見込まれることから、2014年の高水準までは到達していないものと思われる。

図5 さといもの卸売価格の推移(山東省)



資料：山東青島萊西市東庄頭蔬菜批發市場服務有限公司

(5) 国内向け出荷動向

山東省で収穫されたさといもの多くは、国内向けに出荷されている。山東省内に加え、近郊の大都市である北京、天津、上海にも供給されている。

なお、山東省以外の主な国内向け産地は、

江蘇省、浙江省、江西省、雲南省などとなっているが、山東省に比べ、収穫量は少ない。

(6) 輸出動向

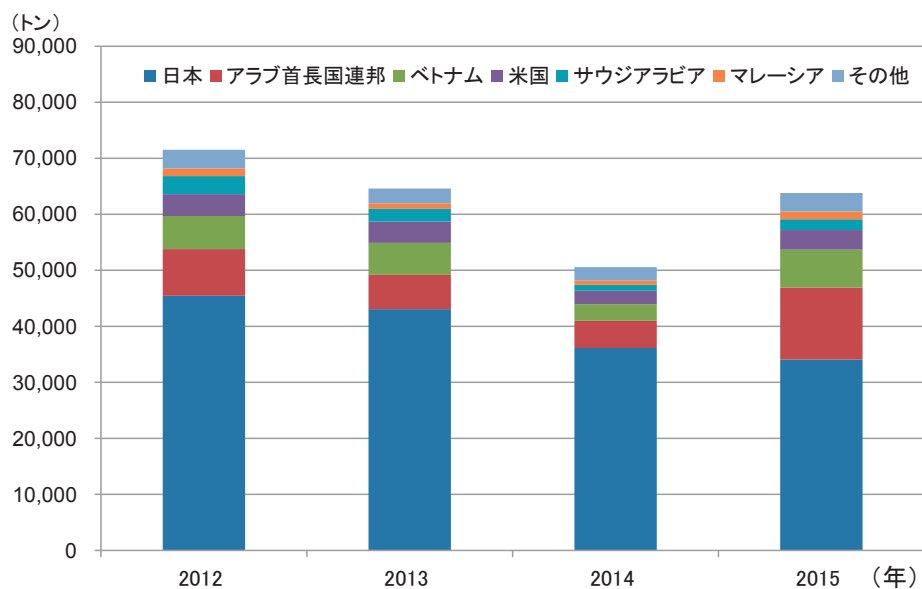
中国のさといも輸出は冷凍品が多い。近年、中国全体で年間5~7万トンの冷凍さ

といものが輸出されているが、そのうち、5万トン前後が山東省の加工施設で製造されたとみられており、輸出向けの主要産地となっている。

輸出先別に見ると、日本が最大の輸出先であり、その他は中東、東南アジア、米国

が主な輸出先である（図6）。なお、日本は安全性に関連する要望や検査が厳しいため、一部の輸出企業は、日本から、アラブ首長国連邦やベトナムに輸出先をシフトしているとみられている。

図6 中国のさといも国別輸出量の推移



資料：「Global Trade Atlas」
注：HSコードは07144000。

2 米国

米国からは、日本への輸出が多いブロッコリー、レタス、セルリー（セロリ）（以下「セルリー」という）について、それらの主産地であるカリフォルニア州を中心とした生産動向を紹介する。また、トピックスとして、2015年のブロッコリーの生産および輸出状況について報告する。

(1) ブロッコリー、レタスおよびセルリーの生産動向

ア ブロッコリー

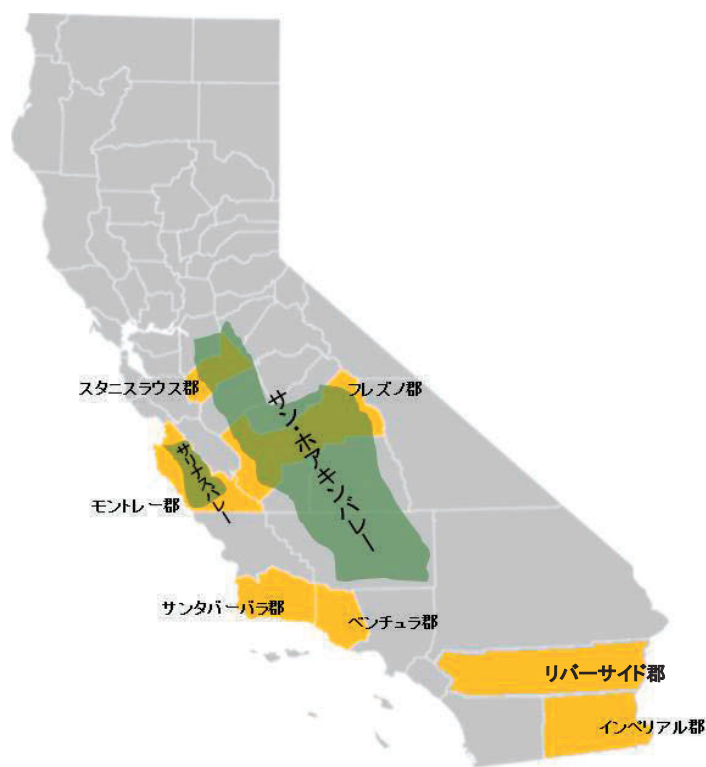
(ア) 作況および作付面積

11月初旬、モンレー郡サリナスバレーおよびサンタバーバラ郡サンタマリアからブロッコリーが出荷されていた（図1）。以後は、インペリアル郡、リバーサイド郡

からの出荷が本格化する見込みである。なお、現地報道によると、11月中旬時点では、カリフォルニア州から出荷されているブロッコリーの品質はおおむね良好と報告されている。

なお、本稿中の為替レートは、1米ドル＝113円（2016年11月末日T T S相場：113.42円）を使用した。

図1 カリフォルニア州の地図



資料：機構作成

(イ) 生産者価格

2016年9月のブロッコリーの生産者価格は、1キログラム当たり0.81米ドル（92円、前年同月比35.7%安）と前月から大幅に上昇した（表1）。この要因としては、

同月にメキシコ産ブロッコリーの出荷が減少したことや、米国の学校の新学期開始による加工ブロッコリーの需要が増加したことなどが挙げられる。

11月初旬から中旬にかけて、ブロッコ

リーの出荷量および品質は安定していたため、価格は比較的安い水準で推移した。11月の3週目の時点では、サリナスバレー産は1カートン（14個入り）当たり9米

ドル（1キログラム当たり0.87米ドル：98円）、サンタマリア産は同7米ドル（同0.67米ドル：76円）で取引されていた。

表1 全米の生鮮ブロッコリーの生産者価格

(単位：米ドル/kg)

	2015年				2016年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
生産者価格	1.26	1.28	1.43	1.87	1.12	0.59	0.68	0.87	1.06	1.09	0.80	0.62	0.81

資料：米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）

(ウ) 対日輸出動向

2016年9月のブロッコリーの対日輸出量は、前年同月比85.1%増の3628トンと、今年に入ってからの最高値を更新した。

一方、輸出単価は同18.4%安の1キログラム当たり約1.11米ドル（125円）と、今年に入ってからの最低値を更新した（表2）。

表2 米国産ブロッコリーの対日輸出量および輸出額

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2015年				2016年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
輸出量	1,960	1,093	602	152	648	1,561	2,562	3,024	2,117	2,780	2,387	2,761	3,628
輸出額	2,675	1,462	769	222	738	1,916	2,980	3,630	2,478	3,485	2,944	3,331	4,013
単価	1.36	1.34	1.28	1.46	1.14	1.23	1.16	1.20	1.17	1.25	1.23	1.21	1.11

資料：米国農務省海外農業局（USDA/FAS GATS Database）

(エ) 東京都中央卸売市場の入荷量および価格

2016年9月の東京都中央卸売市場の米国産ブロッコリーの入荷量は、前年同月比12.7%増の160トンであった。卸売価格は1キログラム当たり379円となり、今

年に入ってからの最高値を更新した（表3）。なお、9月に同市場で最も入荷量が多かったブロッコリーは北海道産であり、その量は約701トン、卸売価格は米国産を大幅に上回る同501円であった。

表3 東京都中央卸売市場の米国産ブロッコリーの入荷量および平均卸売価格

(単位：トン、円/kg)

	2015年				2016年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
入荷量	142	126	55	18	4	33	178	162	143	117	115	118	160
卸売価格	435	416	306	173	331	335	314	353	323	343	340	310	379

資料：東京都中央卸売市場

イ レタス

(ア) 作況および作付面積

10月末から11月初旬にかけて、モントレ郡のレタスの収穫期は終わりを迎えつつある中で、同郡のサリナスバレーから出荷されたレタス（グリーンリーフレタスを

除く）の品質にはバラツキが発生していた。なお、同郡では12月7日から21日の間、モザイク病の発生を防ぐため圃場でのレタス栽培が禁止された。

また、11月の3週目にはフレズノ郡でも収穫が行われており、今後はサン・ホア

キンバレー中部やアリゾナ州ユマからの出荷も本格化する見通しである。

(イ) 生産者価格

2016年9月の結球レタスの生産者価格は、生産量の増加に伴う需給の緩みから、前年同月比57.4%安の1キログラム当たり0.46米ドル（52円）と、8月に続き低調に推移した（表4）。

現地報道によると、11月の価格は前月

に引き続き、安定した水準で推移している。11月3週目の時点では結球レタスは1カートン当たり約7～8米ドル（1キログラム当たり約0.31～0.35米ドル：約35～40円）、ロメインレタスは約8～10米ドル（同0.35～0.44米ドル：約40～50円）、グリーンリーフレタスも約8～10米ドル（同0.35～0.44米ドル：約40～50円）で取引されていた。

表4 全米の結球レタスの生産者価格

(単位：米ドル/kg)

	2015年				2016年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
生産者価格	1.08	0.76	1.32	1.14	0.93	0.46	0.34	0.46	0.72	0.57	0.57	0.46	0.46

資料：米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）

(ウ) 対日輸出動向

2016年9月の結球レタスの対日輸出量は、前月を上回る389トン（前年同月比55.0%増）で、輸出単価は前年同月比3.4%安の1キログラム当たり1.12米ドル

（127円）であった（表5）。一方、結球レタス以外の対日輸出量は、同8.7%増の50トンで、輸出単価は同16.0%安の1キログラム当たり1.99米ドル（225円）であった（表6）。

表5 米国産レタスの対日輸出量および輸出額（結球レタス）

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2015年				2016年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
輸出量	251	299	182	49	128	176	144	120	197	205	253	330	389
輸出額	292	306	207	51	144	208	203	171	223	216	245	342	435
単価	1.16	1.02	1.14	1.04	1.13	1.18	1.41	1.43	1.13	1.05	0.97	1.04	1.12

資料：米国農務省海外農業局（USDA/FAS GATS Database）

表6 米国産レタスの対日輸出量および輸出額（結球レタス以外）

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2015年				2016年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
輸出量	46	55	4	22	68	80	40	39	27	14	29	4	50
輸出額	109	71	6	42	81	169	121	60	29	12	77	12	99
単価	2.37	1.29	1.58	1.95	1.20	2.12	3.03	1.52	1.07	0.86	2.63	3.24	1.99

資料：米国農務省海外農業局（USDA/FAS GATS Database）

(エ) 東京都中央卸売市場の入荷量および価格

2016年9月の東京都中央卸売市場の結球レタス以外の米国産レタス（ロメインレ

タス、フリルレタスなど）の入荷量は前年同月並みの0.4トンで、卸売価格は7、8月同様、1キログラム当たり518円（前

年同月比21.3%高)であった(表7)。なお、同月は、米国産結球レタスは入荷されなかった。一方、最も入荷が多かった結球

レタスは長野産であり、その量は約6500トンで、卸売価格は同192円であった。

表7 東京都中央卸売市場の米国産レタスの入荷量および平均卸売価格(結球レタス以外)

(単位:トン、円/kg)

	2015年				2016年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
入荷量	0.4	0.6	0.4	0.4	0.4	6.0	0.5	0.5	0.2	0.5	0.2	0.5	0.4
卸売価格	427	410	445	413	518	535	518	518	518	399	518	518	518

資料:東京都中央卸売市場

ウ セルリー

(ア) 作況および作付面積

11月初旬、モンレー郡サリナスバレーからセルリーが潤沢に出荷され、品質はおおむね良好と報告されていた。また、サンタバーバラ郡サンタマリアやベンチュラ郡オックスナードでもセルリーの収穫が行われていた。11月初旬の時点では出荷量は安定していたが、需要が伸びる感謝祭(11月24日)の時期は供給不足となる可能性が生じていた。

(イ) 生産者価格

2016年9月のセルリーを生産者価格

は、各産地の出荷が潤沢だったことから、過去一年で最も安い1キログラム当たり0.35米ドル(40円)を記録した(表8)。

その後、感謝祭の前はセルリーの需要は増加しており、価格は上昇傾向にあった。11月3週目の時点では、サリナスバレー産は1カートン(24茎)当たり約16.5~18.5米ドル(1キログラム当たり約0.61~0.68米ドル:約69~77円)、サンタマリア産は約13米ドル(同0.48米ドル:約54円)、オックスナード産は約18.5~20.5米ドル(同0.68~0.75米ドル:約77~85円)で取引されていた。

表8 全米の生鮮セルリーの生産者価格

(単位:米ドル/kg)

	2015年				2016年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
生産者価格	0.50	0.62	0.89	1.32	1.48	0.66	0.41	0.44	0.58	0.41	0.39	0.36	0.35

資料:米国農務省全国農業統計局(USDA/NASS)

(ウ) 対日輸出動向

2016年9月のセルリーの対日輸出量は、前年同月比8.7%減の597トンで、輸

出単価は前年同月並みの1キログラム当たり0.67米ドル(76円)と、7月以降低下傾向で推移していた(表9)。

表9 米国産セルリーの対日輸出量および輸出額

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2015年				2016年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
輸出量	654	423	444	230	332	451	788	672	607	555	697	602	597
輸出額	447	282	324	166	319	387	661	526	533	534	635	511	401
単価	0.68	0.67	0.73	0.72	0.96	0.86	0.84	0.78	0.88	0.96	0.91	0.85	0.67

資料：米国農務省海外農業局 (USDA/FAS GATS Database)

(工) 東京都中央卸売市場の入荷量および価格

2016年9月の東京都中央卸売市場の米国産セルリーの入荷量は、前年同月比18.8%減の26トンで、卸売価格は同11.8%高の1キログラム当たり209円で

あった(表10)。なお、同月に最も入荷量が多かったセルリーは長野産(738トン)であり、価格は米国産をかなり上回る同232円であった。

表10 東京都中央卸売市場の米国産セルリーの入荷量および平均卸売価格

(単位：トン、円/kg)

	2015年				2016年								
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
入荷量	32	32	24	25	13	15	23	26	25	25	26	27	26
卸売価格	187	189	171	178	290	309	228	215	222	208	204	201	209

資料：東京都中央卸売市場

(2) トピックス

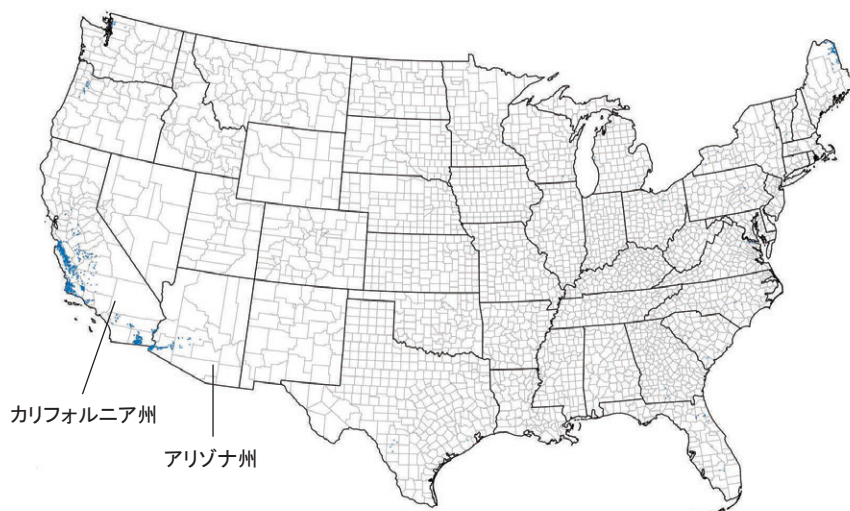
～2015年のブロッコリーの生産および輸出状況～

ア 米国のブロッコリー生産概要

米国のブロッコリー生産の約95%はカリフォルニア州に集中しており、同州とア

リゾナ州(約5%)で全米総生産量をほぼ占めている(図2)。カリフォルニア州の年間生産量は過去10年間にわたり78～90万トン強で推移しており、2013年以降はやや減少傾向で推移している。しかし、単収は比較的安定しており、2012年以降

図2 ブロッコリー生産地分布(2012年)



資料：USDA

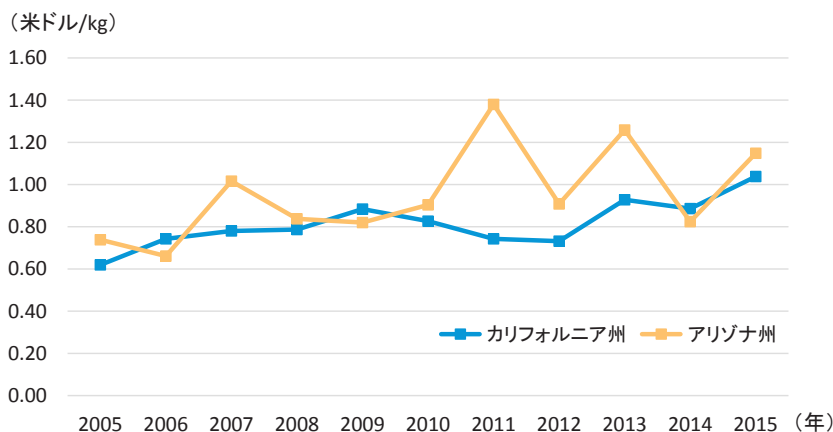
注：青い点1つが収穫面積100エーカー(40.5ヘクタール)を示す。

は10アール当たり約1.8トンと、過去10年間で最も高い水準で推移している。このことから、近年の生産量の減少は主に作付・収穫面積の減少に起因しているとみられ、いずれも2013年には5万ヘクタール以上であったものの、2014年には約4.9万ヘクタール、2015年には約4.7万ヘクタールとなっている。

また、カリフォルニア州では2010年代初頭の記録的な干ばつ以来ブロッコリーの栽培面積を減らし、より少ない水で栽培できる作物に切り替える農家が増えている。

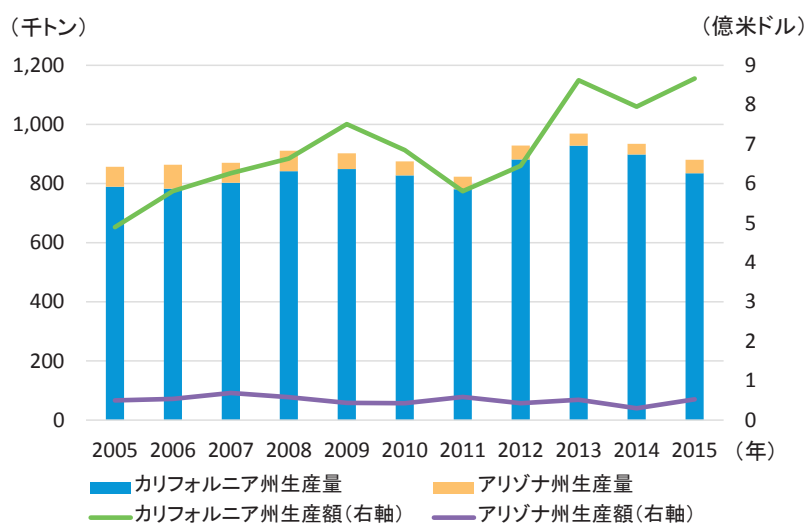
また、同州は2015年、異常気象に見舞われ、夏は猛暑や急な気温の低下、冬は霜や大雨など、ブロッコリーの単収と品質は大きな打撃を受けた。こうした生産量の減少に伴い、カリフォルニア州産ブロッコリーの生産者価格は上昇し、2012年の1キログラム当たり0.73米ドル（82米ドル）から2015年には同1.04米ドル（118円）となった（図3）。また、生産額も2012年の訳6.5億米ドル（735億円）から2015年には約8.7億米ドル（983億円）と3割程度増加した（図4）。

図3 州別ブロッコリー生産者価格の推移



資料：USDA

図4 州別ブロッコリー生産量および生産額の推移



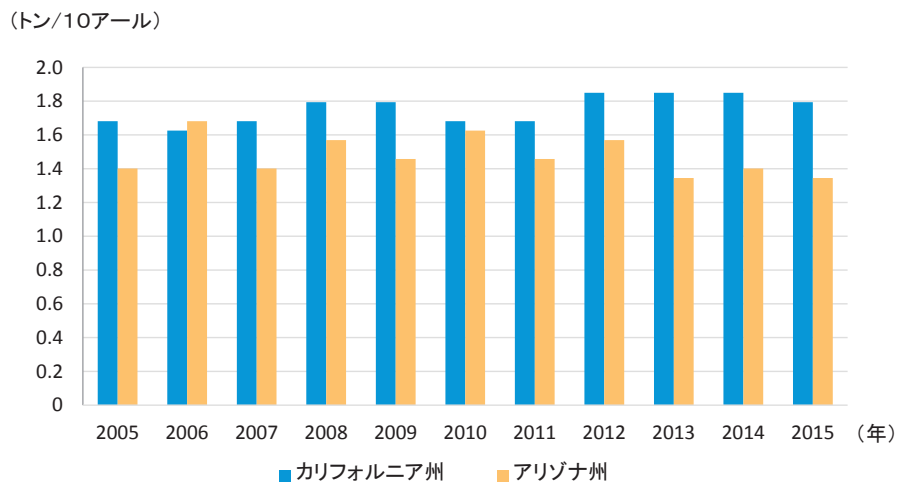
資料：USDA

生産量は、全米第2位のアリゾナ州でも減少傾向で推移している。2006年には約8.1万トン生産されていたが、2014年には3.6万トンと過去10年間で最も低い値を記録した。しかし、カリフォルニア州とは対照的に、2015年には生産量は増加に転じ、4.6万トンとなった。これは、カリフォルニア州の減産を部分的に補うためと考えられる。ちなみに、2015年は、生産額は5251万7000米ドル（59億3442万円）

と、カリフォルニア州を大幅に下回るものの、生産者価格では同州を上回る1キログラム当たり1.15米ドル（130円）であった。

なお、単収については、一般的にカリフォルニア州がアリゾナ州を上回って推移しており、2015年はカリフォルニア州が10アール当たり179トン、アリゾナ州が同135トンであった（図5）

図5 州別ブロッコリー単収の推移



イ 2015年のカリフォルニアのブロッコリー生産状況

前述の通り、2015年、カリフォルニア州のブロッコリーの収穫は天候に大きく左右された。1月から4月にかけてカリフォルニア州は季節外れの暖かさに見舞われたため、作物の成長が早まり、モンレー郡サリナスバレーおよびセントラルバレーのブロッコリーの収穫は平年より早く、3月に開始された。3月から5月にかけてモンレー郡サリナスバレー、サンタバーバラ郡サンタマリア、スタニスラウス郡などで収穫されたブロッコリーの品質および生産量は良好であった。7月の時点では生産量

は平年並みであったが、スタニスラウス郡では、茎の空洞、つぼみの変色など高温による品質の問題が生じた。

8月から9月にかけては平年より気温が高く、モンレー郡でもブロッコリーの品質低下（生育不良、花茎の中が空洞化など）が発生したほか、40度以上の猛暑日には午後の作業は取り止めとなったため、収量も減少した。9月下旬から10月にかけては天候が回復し、出荷量は増えたが、11月下旬から12月にかけてカリフォルニア州では寒暖の差が大きかったため、ブロッコリーの生育および収穫に影響があった。12月中旬から2016年1月にかけては豪

雨や霜による被害が相次いだほか、収穫作業が制限されたため、収量が平年以下となった。

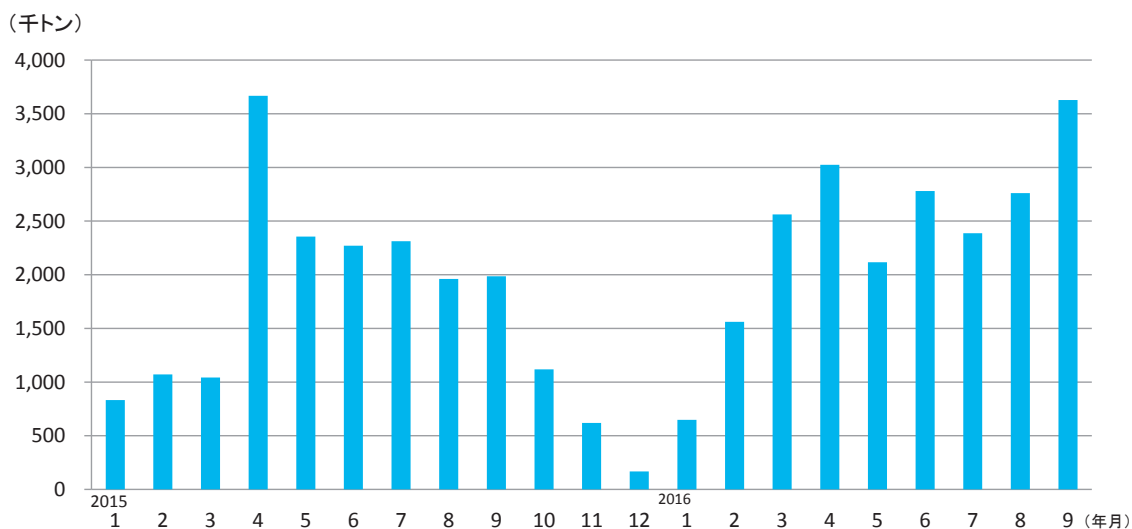
なお、カリフォルニア州で生産されているブロッコリーの品種は地域により異なるが、中央沿岸部ではコンコード、グリーンベルト、ヘリテージ、インペリアル、マラソン、パトリオットなどが主に栽培されており、南に位置するインペリアル郡ではキャッスルドーム、デスティニー、エメラルドクラウン、グリーンマジック、リバティーなどが栽培されている。

ウ 最近の米国産ブロッコリーの対日輸出状況

2015年の対日輸出状況を見てみると、

米国西海岸で起きた港湾作業の遅れの問題は2～3月に影響を与えたものの、輸出が集中する春から夏の時期には問題が解消され、対日輸出が回復した。長期的なトレンドで見ると、国産ブロッコリーの生産が多くなる11～3月の間は米国産ブロッコリーの輸出が少なく、春から夏にかけて増えるという特徴がある。2016年は同様のトレンドを示したものの、9月に輸入が大きく増えている。8月末に北海道などで発生した台風や天候不良により国産ブロッコリーの生産が影響を受けており、9月の米国からの輸入急増は国内生産の減少分を補うためのものであるとみられる（図6）。

図6 米国産ブロッコリーの対日輸出量の推移



資料：米国農務省海外農業局（USDA/FAS GATS Databas）